



解 説 書

えさし郷土文化館

2025年 7月5日(土)～7月27日(日)

奥州市埋蔵文化財調査センター

8月9日(土)～8月31日(日)

奥州市衣川総合支所

9月4日(木)～9月17日(水)

胆沢郷土資料館

10月4日(土)～11月2日(日)

奥州市牛の博物館

11月15日(土)～12月21日(日)

ごあいさつ

奥州市教育委員会では、郷土の歴史と文化を広く市民の皆様に知っていただくことを目的に、えさし郷土文化館、奥州市埋蔵文化財調査センター、衣川総合支所、胆沢郷土資料館、奥州市牛の博物館を会場とする巡回展を開催しています。

今年度の巡回展では「^{おうしゅうふうがのときがたり}らずもねえ—奥州風雅乃時語—」と題し、江戸から明治にかけて奥州市に伝わる浮世絵や肉筆画、写本、版本類を紹介いたします。これらの資料を通して、当時の人々に親しまれた出版文化や文芸の広がりを読み解き、地域の文化的な営みに光を当てます。

「らずもねえ」とは、岩手県南から宮城県域にかけて使われる方言（仙台弁）で、「とんでもなく」や「すごい」といった意味を持ちます。本展ではこの言葉を象徴的に用い、副題の「奥州風雅乃時語」とともに、奥州市に息づく優雅な歴史と文化の物語を感じていただける構成としました。

会場に並ぶ絵入り本や浮世絵の繊細な表現からは、地域の先人たちの知的な好奇心や美意識、さらには洒脱な遊び心が感じられます。また、都市部とは異なる環境の中で活躍した在郷の絵師や文人たちの活動にも注目し、地方における風雅のあり方や文化の多様性を浮き彫りにします。

この展示が、身近にありながらも見過ごされがちな地域文化の奥深さを再発見する機会となり、次代へとつなげる一助となれば幸いです。ぜひ多くの皆様にご来場いただき、「らずもねえ」奥州市の歴史と文化の魅力をご堪能ください。

令和7年7月

奥州市教育委員会

教育長 高 橋 勝

凡 例

- 1 本書は、令和7年7月5日（土）から12月21日（日）まで、奥州市内の5施設において開催する巡回展「奥州市文化財調査速報展 2025 らずもねえ 奥州風雅乃時語」の解説書である。
- 2 本書での資料掲載順は、展示順序と一致するものではない。
- 3 展示会場の規模等の事情あるいはその他の都合により、本書掲載の資料が展示されない場合がある。
- 4 本書の執筆は野坂晃平（えさし郷土文化館）、森本陽（奥州市牛の博物館）が本論、遠藤栄一（奥州市埋蔵文化財調査センター）、及川真紀（奥州市教育委員会歴史遺産課）、朴沢志津江（同）、高橋和孝（同）、羽柴南枝（同）が「最新の発掘調査成果」「奥州市資料調査速報」を担当し、このうち「上萩森遺跡」を東京大学文学部考古学研究室、「中井遺跡」「中林下遺跡」を公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに寄稿頂いた。
- 5 本書は、えさし郷土文化館が作成し、奥州市教育委員会歴史遺産課、一般財団法人奥州市文化振興財団奥州市埋蔵文化財調査センターが編集した。

地方に息づく風雅のかたち

—胆江地方にみる暮らしと文化の美意識—

江戸時代、日本全国に武家社会の秩序が整備される中で、「風雅」や「嗜み」といった文化的価値観もまた、身分や地域を越えて広く浸透していきました。武士階級における礼法や教養、町人社会における粋や洗練と結びついたこれらの価値は、美しい所作や四季を愛でる心、簡素の中に美を見出す感性といった、日々の生活に深く根ざした文化的態度として、各地に定着していきました。それらは、幕府の置かれた江戸や文化の中心であった上方（京都・大坂）に限らず、広大な地方の隅々にまで静かに浸透し、各地の自然や暮らしの中で、それぞれの地域固有のかたちで育まれていったのです。

現在の奥州市を含む胆江地方は、江戸時代には仙台藩の北辺に位置し、北上川の流れと奥羽山脈・北上山地に囲まれた自然豊かな地域でした。古くから交通と交易の要衝であり、農業も盛んな土地として栄えてきました。この地に暮らした人々もまた、江戸や仙台で発展した礼法や教養、文化に触れながら、それらを地域の風土と響き合うかたちで受け入れ、独自の暮らしの美を築き上げていったのです。

その中には、出版文化や文芸の広がりも含まれます。江戸や上方で流行した浮世絵や版本は、遠く胆江の地にも伝わり、人々の生活に彩りを与えていました。地元の寺院や商家には、版本や和綴じ本が伝来し、江戸の文学や教訓書、絵入りの実用書などが読まれていました。また、素人狂歌や俳諧といった文芸活動も、武士や町人、農民の間に広がり、地域ごとの連句集や書き物が残されている例もあります。これらは、情報や娯楽を求める庶民の知的好奇心と、それを受け入れる文化的素地が、この地方にも確かに存在していたことを物語っています。

風雅は、単に中央から与えられた文化を受け取るだけではなく、それを自らの暮らしの文脈に引き寄せ、丁寧に再構成する営みの中から育まれていきました。質素で端正な屋敷構え、慎ましやかな装い、書画や調度品に表れる洗練された美意識。こうした在り方には、ただ模倣するのではなく、工夫を加え、自分たちの価値として深めていこうとする静かな誇りがにじんでいます。

この感性は、武士だけにとどまらず、庶民の生活にも確かに根づいていました。農作業に使われた木製の道具や日用品には、実用性を超えた美しい意匠が施され、祭礼や年中行事に使われる装束や飾りにも、地域特有の色や形が見られます。とりわけ手仕事の文化は、生活と美の境界を超えて、心を込めたものづくりの精神を今に伝えています。

このように、近世の日本社会は、単純に「中央」と「地方」に分けられるものではありませんでした。制度や礼法といった共通の枠組みを持ちつつも、各地にはその土地ならではの歴史、風土、人々の記憶があり、そうした背景の中で独自の文化が育まれていったのです。胆江地方もまた、そのような文化的多様性を体現する一地域であり、そこに息づく営みは、現代の私たちにとっても豊かな学びの源となります。

名もなき人々が築き、伝えてきた風雅のかたちは、地方の文化遺産として、今なお私たちの暮らしの中に脈々と流れ続けています。浮世絵や版本、文芸、生活の中に見出される美意識。それらをひもとくことは、過去を知ることだけでなく、今をよりよく生きるための感性を育む営みにほかなりません。

地方に残る静かな風雅の輝きに、私たちはあらためて目を向けてみるべきではないでしょうか。



えさしぐんいわやどうようがいやしきふしんたてまつりうかがうおんえず
江刺郡岩谷堂要害屋舗普請奉窺御絵図

肉筆画 彩色絵図／享保 11 年（1726）／えさし郷土文化館

岩谷堂要害屋敷は、江刺岩谷堂の標高 114 メートルの独立丘陵（館山）上に築かれた山城を前身としています。

中世末期には江刺氏の居城として機能し、豊臣秀吉の奥羽仕置の際には大谷吉継が縄張りを実施。のちに伊達政宗の所領となり、近世には伊達忠宗の御部屋領を経て、七男・宗規^{むねのり}に与えられました。以後、明治維新に至るまで岩谷堂伊達家の居館として存続します。

敷地は尾根上に本丸・中曲輪・二の丸が展開し、土塁・空堀・堀切・虎口・馬出しなどの防御構造が現存しています。大手門には外柵形、裏門には搦手口と柴垣が備えられ、全体として堅固な山城として構築されていました。

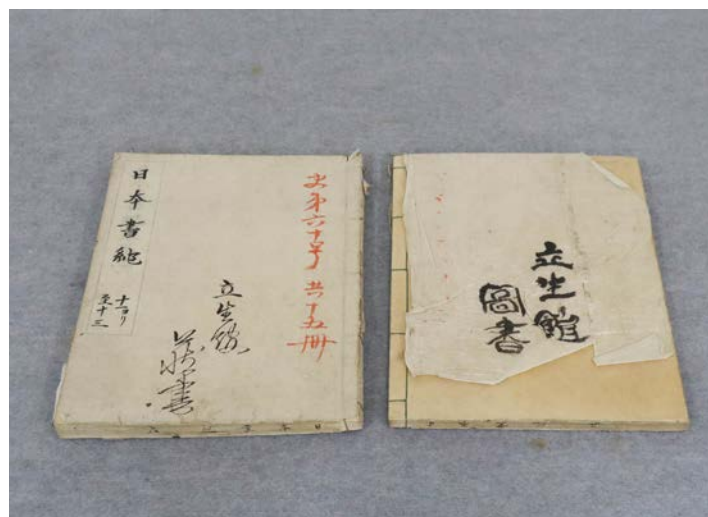
本図は、屋敷地の大手門や柴垣の修繕を藩に願い出る際に作成されたもので、人首川^{ひとくべ}が流れる急崖上の立地や周囲の山林の木々などが色彩豊かに描かれており、伊達家の在郷屋敷の姿をよく伝えています。

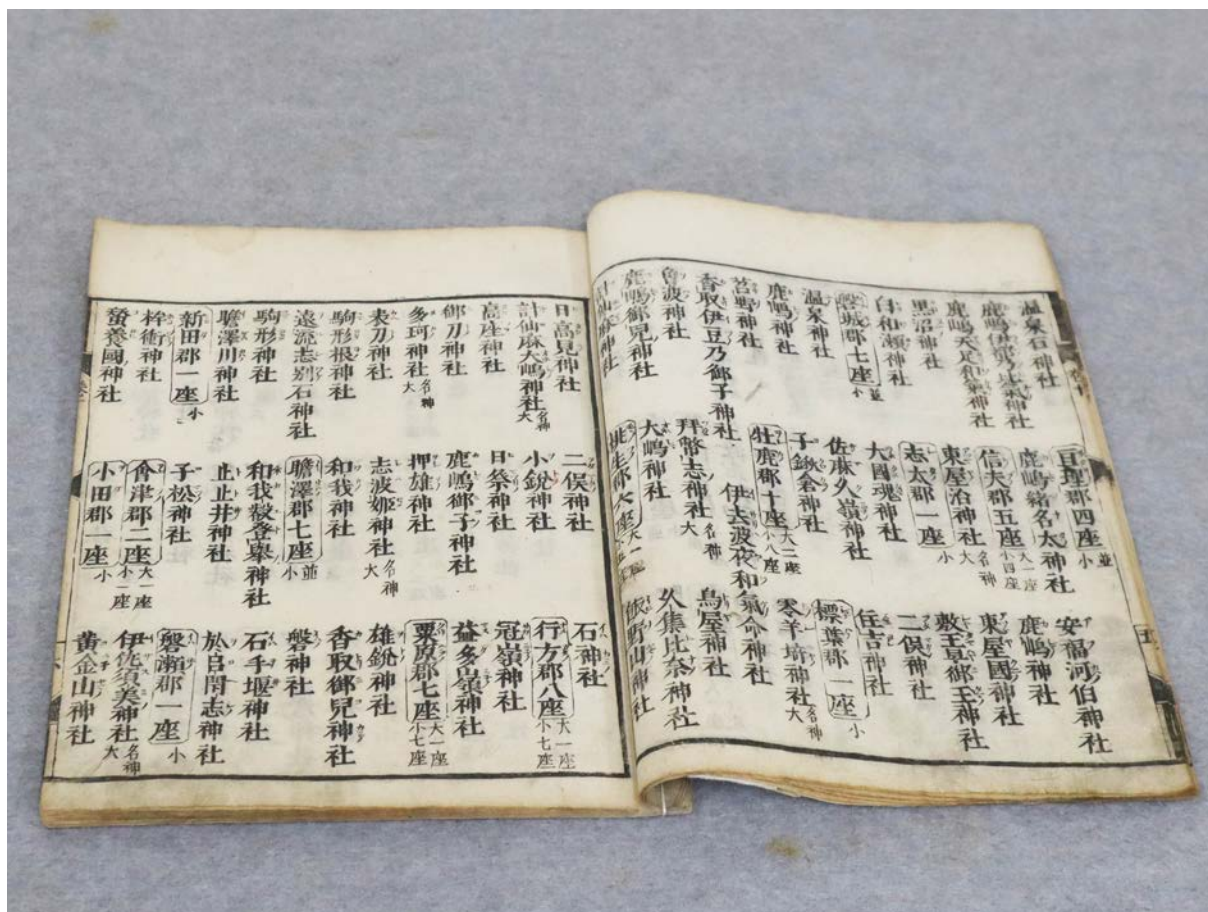


立生館蔵書『日本書紀』

版本 元治元年（1864） 補刻本／奥州市

立生館は水沢伊達氏が天保6年（1835年）に開設した郷学です。その名称は『論語』の一節「本立道生（根本が既に立つとき、その道は自ら生ずる）」に由来し、「立生」の二文字が講堂に掲げられて、教学の精神を象徴していました。教育の対象は、家臣の子弟を中心としながらも庶民の子にも門戸を開いており、開かれた学び舎として地域に根ざしていた点が特徴です。士分の子弟には『孝経』や『四書』『五経』などの儒教経典が、庶民の子弟には『実語教』『童子教』『商売往来』など、実用的な教科書が用いられました。これらの儒学を中心とした道德教育と並行して、日本最古の正史である『日本書紀』も教材として用いられており、日本固有の伝統や国体観の涵養が図られていました。こうした教育方針は郷学における徳育と歴史認識の重視をよく示しています。





立生館蔵書『延喜式』

版本 江戸時代後期 補刻本／奥州市

『延喜式』は平安時代中期の延喜5年（905年）に、醍醐天皇の命によって編纂が始められた格式（律令の施行細則）であり、全50巻から成る法令集です。約20年の歳月を経て、延長5年（927年）に完成しました。

その内容は、宮中の儀式や祭祀の手順、官庁の組織や職務、租税制度、地方行政、神祇関係など多岐にわたり、律令制の実務的運用を具体的に示すものとして、当時の国家統治や宗教儀礼、行政の実態を知るうえで欠かせない基礎資料となっています。特に神祇関係を扱う巻には、全国の官社を記した「延喜式神名帳」が収録されており、現在の奥州市域にあたる胆沢郡の七座、江刺郡の一座が掲載されていることが確認できます。これらの記載は、古代における信仰や祭祀のあり方を知るうえで極めて重要であり、地域信仰史研究にも貴重な手がかりを提供しています。

ひげんかん
比賢館版木（白鹿洞書院掲示）

版木 天保 14 年（1843）

えさし郷土文化館

比賢館は岩谷堂伊達家が天保 12 年（1841）に開設した学問所です。学頭には、同家の分家出身で、仙台藩の藩校・養賢堂で学んだ片岡泰一郎（岩城一郎）が任命され、家中の子弟教育を担いました。天保 14 年（1843 年）頃には、同館において『童蒙須知』『白鹿洞書院掲示』『朱子訓』などの教科書が印刷・出版されており、その際に使用された版木が現在も遺されています。

これらの木版がまとまって現存していることは極めて稀であり、藩政時代の教育の実態や、藩校における具体的な教育内容を知るうえで、非常に貴重な資料となっています。



比賢館本『白鹿洞書院掲示』

版本 天保 14 年（1843）

えさし郷土文化館

『白鹿洞書院掲示』は、宋代の儒学者・朱熹が江西省の白鹿洞書院で制定した学問・修養のための規範をまとめたものです。学ぶ者が日常生活において守るべき礼節や態度、そして学問に取り組む基本姿勢を簡潔に示しています。

比賢館で印刷・出版された『白鹿洞書院掲示』は、在郷の子弟教育の教材として用いられ、岩谷堂伊達家における教育水準や郷学の実態を示す貴重な資料となっています。



小川の出店

中判 葛飾北斎／江戸時代後期／えさし郷土文化館

葛飾北斎は、江戸時代後期を代表する浮世絵師です。代表作『^{ふがく}富嶽三十六景』では、斬新な構図と大胆な表現によって雄大な富士山を多角的に描き、風景画の新たな地平を切り拓きました。美人画、役者絵、花鳥画、漫画、工芸の下絵に至るまで幅広い分野で活躍し、90歳近くまで創作を続けたその生涯は、常に画風を進化させる探究心に満ちていました。

本作では、小川に沿った道筋の風景が描かれており、そこに暮らす人々の動きや仕草を通して、北斎が日常に潜む美を鋭く捉えていたことがうかがえます。庶民の生活の一瞬を切り取るそのまなざしは、単なる写実を超えた「生きた風景」を描き出しており、観察力の深さが際立っています。



風流四季乃遊 卯月の時鳥

中判 喜多川歌麿／江戸時代後期／えさし郷土文化館

江戸時代の風俗や世相を鋭く捉え、版元・蔦谷重三郎との協業によって数多くの名作を生み出した喜多川歌麿の作。

とりわけ、役者絵で用いられていた上半身を大きく描く構図を美人画に応用した「美人大首絵」は、背景を省略し女性の顔をクローズアップすることで、精緻な表情描写を可能にした新たな表現様式であり、歌麿の代名詞ともなりました。

本作は、1月から12月までの月ごとの風俗を描いた12枚揃いのうちの一枚で、卯月(旧暦4月)にあたります。初夏の季語であるホトトギスを背景に、新緑を経て陽射しが次第に強まる季節感を表現。手拭いで汗をぬぐう仕草や日傘を開こうとする2人の女性の姿から、当時の暮らしの一瞬が生き生きと伝わってきます。



前九年之内 康平五年九月 奥州衣川合戦
大判三枚続 歌川芳員／江戸時代／えさし郷土文化館

歌川^{よしかず}芳員は国芳門人として幕末から明治期に活躍。武者絵、花鳥画、草双紙^{くさごうし}挿絵^{さしえ}などを得意としましたが、横浜開港後は異国風俗を描き、横浜絵の先駆者としても知られています。

本作は永承6年(1051)の「鬼切部の戦い」に端を発した「前九年合戦」を描いています。緒戦では安倍軍の圧倒的な戦力を前に国府軍は辛酸を舐め続け、さらに安倍氏の女婿で国府の将であった藤原経清が帰属したことで、安倍軍は一層優位の状況を保っていました。

戦況が一変したのは康平5年(1062)。出羽国の清原氏が1万の兵力を率いて参戦したことにより、安倍氏の柵は次々と陥落。安倍軍は敗走を余儀なくされました。衣川を越えた源義家が安倍軍に迫り、それを安倍貞任^{さだとう}が迎え撃つ姿が大きく描かれ、画面右端には毅然とした様子で国府軍に対峙する藤原経清の姿もあります。また、この衣川の合戦からは義家と貞任にまつわる「一首坂^{いっしゅざか}」の故事も生まれました。



奥州征討

大判三枚続 歌川芳虎 (錦朝桜) / 安政3年 (1856) / えさし郷土文化館

衣川の戦いに敗れた安倍軍は北へ敗走。

源氏の軍勢は奥六郡内部へと突入し、鳥海柵をはじめ安倍氏側の各城柵を次々に陥落させながら北上し、厨川柵を目指します。難攻不落と称された厨川柵に籠城した安倍貞任や藤原経清による迎撃は、源氏軍を大いに苦戦させましたが、ついに貞任は戦死し、捕らわれた経清は国司・源頼義の憎悪を一身に浴び、鈍刀で斬首されました。ここに12年間におよぶ前九年合戦が幕を閉じます。

本図は、騎乗の貞任に源義家が迫り、経清が捕縛される姿が描かれています。



八幡太郎義家康平年間頼時貞任の朝敵をほろぼし宗任をつれ都へ帰陣の図
三枚続 歌川国芳(一勇斎)／嘉永年間／えさし郷土文化館

前九年合戦で捕らえられた安倍宗任^{あべのむねとう}は源義家によって都へ連行されます。

都の貴族たちは、「奥州の蝦夷^{えみし}は花の名など知らないだろう」と侮蔑し、藤原光頼が宗任に梅の花を見せて「これは何か」と嘲笑したところ、「わが国の梅の花とは見つれども大宮人はいかが云ふらむ」と歌で答えて貴族たちを驚かせました。その後、宗任は四国の伊予国に配流されますが、宗任の娘は平泉藤原氏の基衡へと嫁ぎ、秀衡を産んだとされています(異説あり)。

歌川国芳は葛飾北斎や歌川広重とともに活躍した江戸時代末期を代表する絵師の一人で、特に『水滸伝』^{すいこでん}の作画が評判となり「武者絵の国芳」とも称されました。



奥州後三年大合戦図

大判三枚続 歌川芳員（一寿斎）／嘉永〜明治3年頃（1848〜54）

えさし郷土文化館

後三年合戦は、清原氏の相続争いを発端に、源義家の介入によって源氏と清原氏の本格的な戦いへと発展しました。沼の柵で義家・清衡連合軍を破った清原家衡は、清原武衡の支援を受けて金沢柵^{かねざわのさく}に拠り、激戦を展開します。しかし、義家の弟・新羅三郎義光^{しんらさぶろうよしみつ}が東北に駆けつけたことで形勢は逆転し、最終的に金沢柵は陥落。家衡・武衡は討死し、戦いは終結しました。

本作には、騎馬の清原武衡と源義家が対峙し、死闘を繰り広げる場面が迫力ある筆致で描かれています。作者の歌川芳員（一寿斎）は歌川国芳の門弟で、武者絵を多く手がけました。のちに横浜開港を機に異国風俗にも関心を示し、「横浜絵」の先駆者としても知られます。



源平屋島合戦之図

大判三枚続 橋本貞秀（玉蘭斎）／江戸時代後期／えさし郷土文化館

橋本貞秀（^{ぎょくらんさい}玉蘭斎）は、歌川国貞に師事し、江戸後期から明治期に活躍しました。特に横浜開港後の風景を描いた「横浜絵」で知られています。

本作では、水上で繰り広げられる激しい戦闘の様子が迫力豊かに描かれています。波濤が^{はとう}荒れ狂う中、武者たちの激闘が躍動感あふれる筆致で表現されており、その臨場感が画面を支配しています。そこに義経の「八艘飛び」が鮮やかなアクセントとして添えられ、英雄的な瞬間が戦いのドラマ性を一層高めています。

貞秀の作品は、慶応3年のパリ万博にも参加し、国内外で評価された作風は幕末・明治期の歴史や文化を伝える貴重な資料です。



壇ノ浦平家一族

大判三枚続 歌川芳虎／江戸時代後期／奥州市武家住宅資料館

歌川芳虎は、歌川国芳の門弟として武者絵や風俗画、開化絵など幅広い分野で力量を発揮。現実の事件や異国風俗を主題とした作品で知られる一方、伝統的な歴史画や幻想的な主題にも積極的に取り組みました。

本作は、壇ノ浦の戦いで滅んだ平家の一族が亡霊となって現れる情景を描いた作品で、幻想と現実が交錯する芳虎ならではの異色作です。波間から立ち現れる霊たちはどこか儚く、不気味な気配を漂わせますが、その一方で周囲に描かれたエイやフグ、カニなどの魚介類は、極めて写実的かつ生き生きと描写されており、幽玄な世界に現実の重みを添える効果を生んでいます。妖しさと写実が同居する本作は、芳虎が持つ劇画的構成力と観察眼を存分に示す作であり、浮世絵が伝統から新時代へと向かう過程において際立った個性を放っています。



奥州高館合戦義経主従勇戦働之事

大判三枚続 歌川国芳（一勇斎）／江戸時代後期／えさし郷土文化館

歌川国芳（一勇斎）は、江戸時代後期を代表する浮世絵師で、歌川豊国に師事。大胆かつユーモアあふれる構図が特徴で、武者絵や妖怪画を得意としました。

本作では、義経主従が平泉・高館の戦いで勇敢に戦う姿が、躍動感あふれる筆致で描かれています。国芳らしい力強い線と迫力ある表現により、激戦の緊迫感や英雄たちの勇壮な姿が生き生きと伝わってきます。



勧進帳

大判三枚続 豊原国周／江戸時代後期／奥州市武家住宅資料館

歌舞伎の名作『勧進帳』を題材とした作品。『勧進帳』は能「安宅」をもとにした物語で、源頼朝に追われる源義経一行が山伏に扮し、安宅の関を越えようとする姿を描いています。初演は天保11年（1840）、江戸の河原崎座で上演され、歌舞伎十八番の一つとして人気を博しました。

作品に描かれた「三舛」とは、河原崎三舛（のちの9代目市川團十郎）を指し、弁慶役の彼の力強い睨みが印象的に表現されています。



梶原平二 関三十郎

中判 歌川国芳／江戸時代後期／奥州市武家住宅資料館

歌舞伎の人気演目『^{かじわらへいぢうはまれのいしきり}梶原平三替石切』の一場面を描いたものです。主人公・^{かげとき}梶原景時（平三）が、無実の石工を救うために硬い石を一太刀で切り、名誉と武勇を示すという場面で、芝居の大きな見せ場となっています。

景時役を演じる関三十郎は、^{あらごと}荒事と呼ばれる豪快で力強い演技を得意とした歌舞伎役者で、その迫力ある舞台姿は多くの観客を魅了しました。



真田与市（佐奈田与一）
小判 歌川国芳／江戸時代後期
奥州市武家住宅資料館

佐奈田与一は、平安時代末期の武将で、諱は義忠。相模国の出身で、源頼朝の挙兵に従い、石橋山の戦いにおいて奮戦しましたが、惜しくも討死しました。その勇猛さから、後世には若き英雄として語り継がれ、歌舞伎や軍記物では美化された姿で描かれました。



ト部すけ為 尾上松助
小判 歌川国安／江戸時代後期
奥州市武家住宅資料館

ト部助為は、主に歌舞伎や浄瑠璃の演目『大森彦七』などに登場する仇役で、佐奈田与一を討った敵将として描かれる人物です。物語上では、奸計（かんけい）をめぐらす悪役として設定されており、主人公・大森彦七の忠義や勇気を引き立てる存在として重要な役割を担います。

この役は、尾上松助など名優によって演じられ、重厚な悪役像に人間味と存在感を与えることで、芝居全体の緊張感と魅力を高めています。巧みな演技により、単なる悪役にとどまらない深みを持つ人物像として描かれることもあります。



太閤記

大判三枚続 豊原国周／江戸時代後期～明治時代／奥州市武家住宅資料館

歌舞伎役者絵を得意とした豊原国周による『太閤記』は、歌舞伎演目「種瓢真書太閤記」の劇的な一場面を鮮やかに描き出した作品。画面には小田春永（織田信長）、森蘭丸、武智光秀（明智光秀）に扮した市川團十郎ら役者たちが威厳と存在感を放ち、大胆な構図と繊細な筆致でその息遣いや舞台の熱気がダイナミックに表現されています。



江戸名所合之内五十五 堀江

中判 豊原国周／江戸時代後期／奥州市武家住宅資料館

豊原国周は役者絵を得意とし、写実的な描写と劇的な構図で人気を博しました。歌川国貞に学び、伝統的な技法を受け継ぎつつ、時代に応じた新しい表現を積極的に取り入れた点が特徴です。一方で名所絵にも取り組んでおり、本作は江戸の名所を題材とした全 55 図から成る連作の一図です。広重風の風景表現に加え、人物を巧みに配した構図が印象的で、この「堀江」の図は、堀割沿いのにぎわいや水辺の風情が調和し、近代化が進みつつある江戸末期の情景を柔らかな筆致と色彩で生き生きと描いています。

国周は浮世絵が変革期を迎える中で、伝統と革新をあわせ持つ絵師として重要な位置を占めています。

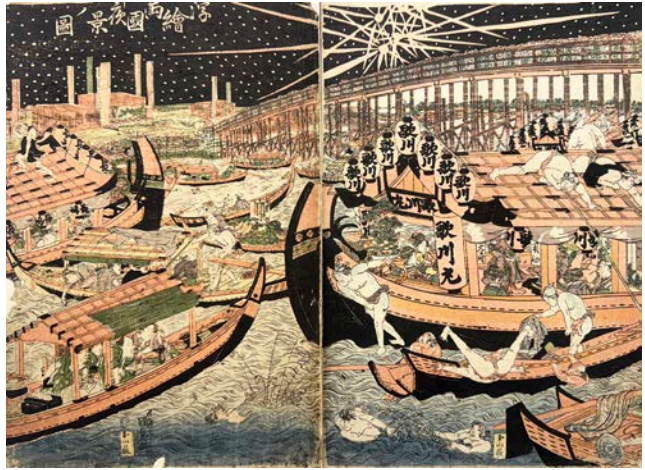
浮絵両国夜景ノ図

大判三枚続のうち右端欠 歌川国貞
江戸時代後期／奥州市武家住宅資料館

歌川国貞は、豊国の門人で美人画や役者絵を得意とし、特に歌舞伎俳優の似顔表現に優れていました。

華やかで洗練された画風は庶民に広く支持され、当時最も人気のある浮世絵師の一人でもあり、晩年には「豊国（三代目）」を名乗りました。

本作は両国橋の花火を題材にしており、画面には隅田川にかかる橋と川面に浮かぶ屋形船が描かれています。人々が花火見物に興じる活気ある情景が広がり、朱や藍を基調とした色彩は国貞の華やかで高度な技法による表現力を物語っています。



両国橋花火

大判錦絵3枚続のうち中央のみ
歌川豊国／文化2年頃（1805）
奥州市武家住宅資料館



歌川派中興、豊国が描いた隅田川の花火の情景。隅田川の花火は歴史が古く、記録の残るものとしては日本最古の花火大会とされています。江戸時代には「両国の川開き」と呼ばれ、毎年大勢の人々で賑わう恒例行事となっていました。

画面中央の両国橋は見物客で埋め尽くされ、川には屋形船が浮かび、裕福な武家や町民が花火を楽しんでいます。一方で、庶民は橋の上や川岸から夜空を見上げて楽しんでいました。享保18年（1733）、前年の大飢饉と疫病の犠牲者を弔い、災厄除けを願って8代将軍・徳川吉宗が隅田川で水神祭を実施。この際、周辺の料理屋が花火を打ち上げたことが、隅田川花火大会の起源とされています。

美人図

小判 勝川春扇（二代 春好）

江戸時代後期／奥州市武家住宅資料館

勝川春扇（かつかわしゅんせん 生没年不詳）は、勝川派に属し二代目勝川春好を名乗ったとされ、初代・勝川春章の流れを汲む絵師です。

役者絵や美人画を得意とし、なかでも歌舞伎役者の個性や躍動感を巧みに捉えた表現に定評があります。明和・安永期（18世紀後半）から文化・文政期（19世紀初頭）にかけて活動したと考えられ、勝川派の中でも存在感を示した絵師のひとりです。



今よう美人

小判 菊川英泉／江戸時代後期／奥州市武家住宅資料館

菊川英泉は、美人画を中心に独自の作風を築いたことで知られます。はじめは読本の挿絵などを手がけた後、歌川豊国や鳥文斎栄之（ちょうぶんさいえいし）の画風を学び、のちに美人画に特化。退廃的で艶やかな雰囲気や、細部まで描き込まれた衣装や髪型の表現が特徴です。また、喜多川歌麿の後継者の一人として位置づけられ、粹で官能的な女性像は町人層から高い人気を博しました。晩年は号を溪斎英泉（けいさいえい）と改め、多くの読本や草双紙の挿絵も手がけています。



伊勢屋屋内 花照
江戸時代 花川亭国富／えさし郷土文化館

歌川国富は、江戸時代後期に活躍した歌川派の浮世絵師で、「一隅斎」や「花川亭」の号を用い、のちに「富信」と改名しました。作画期は文政から天保年間にかけてで、見立役者絵・遊女絵・武者絵など、幅広いジャンルに取り組んでいます。

中でも花魁^{おいらん}図においては、豪華な衣装の文様や髪飾りの細部に至るまで丁寧に描き込み、当時の遊郭文化や流行の様相を色濃く映し出しています。画風は癖がなく、柔らかで穏やかな表情やしなやかな線描が特徴で、女性の美しさを繊細に表現しました。

国富が描く花魁たちは、単なる美の象徴としてだけでなく、当時の女性が持ったおやかさや誇りをも体現する存在として捉えられます。



かいこやしなぐさ
蚕養草

中判 落合芳幾／明治元年（1868）
奥州市武家住宅資料館

幕末から明治にかけて活躍した落合^{よしいく}芳幾による作品。歌川国芳の門人であった芳幾は、役者絵や武者絵、美人画を手がけたほか、明治期には新聞錦絵や報道挿絵の分野で活躍し、浮世絵から近代メディアへの橋渡し役として重要な存在となりました。月岡^{つきおか}芳年と並び、「東京日日新聞」の挿絵などを数多く制作し、時事的な題材を扱った錦絵によって新たな表現を切り開きました。

『蚕養草』は、養蚕の各工程を図解した教育的な錦絵で、女性たちが手がける作業風景を克明に描いています。美術性と啓蒙性を兼ね備えた本作は、芳幾が時代の変化に応じながらも、浮世絵の伝統を活かした好例といえます。



影遊び蚕養乃姿絵

中判 歌川芳虎／明治時代
奥州市武家住宅資料館

芳虎は、武者絵や歴史画を得意とし、師・歌川国芳譲りの迫力ある筆致で知られましたが、明治維新後は、文明開化や海外事情を題材とした作品にも取り組み、洋風表現を取り入れた異国風俗画でも注目を集めます。写実性と劇的な構図を兼ね備えたその画風は、当時の人々の営みを視覚的に記録する役割も果たしました。

てんまんだいじざいとくてんじん
天満大自在威徳天神
二枚続 歌川芳虎／元治元年 (1864)
奥州市牛の博物館

学問や農耕の神として信仰される菅原道真は、牛に乗った姿、いわゆる「牛乗り天神」としても広く知られています。衣には神紋である梅鉢紋があしらわれ、背景には道真とゆかりの深い松が描かれています。道真が丑年生まれであったことや、遺体を運ぶ牛車が動かなくなった地に太宰府天満宮が建立されたという伝説などから、牛との結びつきが深い存在とされています。





玩具絵 新版天神づくし
中判 歌川重清／明治時代
奥州市武家住宅資料館

玩具絵は江戸時代から明治時代にかけて制作された浮世絵の一様式で、子どもが遊んだり絵本のように楽しんだりするための版画です。江戸時代には「手遊び絵」とも呼ばれ、中でも「学問の神」天神を題材とした作品が多く、子どもに天神を親しませ、学業成就を願う親心が込められていました。

この分野で活躍した歌川重清は、子ども向けの題材や教育的要素を得意とする浮世絵師で、温かみのある繊細な画風により、多くの玩具絵を手がけました。



玩具絵 新版口物 天神づくし
中判 歌川房種／明治時代
奥州市武家住宅資料館

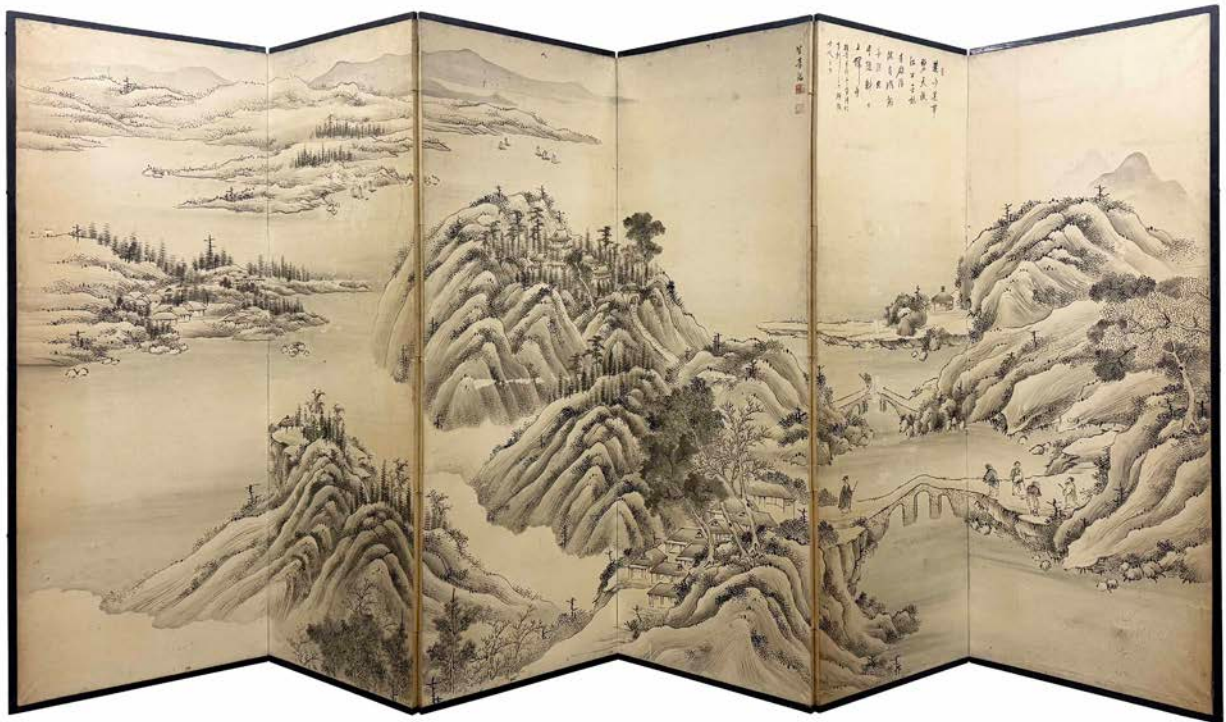
歌川房種は歌川国芳の門人とされ、団扇絵をはじめ、玩具絵や絵本、図解的な版画などを手がけ、動植物や武具、建物などを精緻に描く実用的な画風を特徴としました。



布引観世音由来

刷物 大判／江戸時代後期／奥州市牛の博物館

老婆が角に布を引っかけた牛を追いかけるうちに善光寺にたどり着き、信仰に目覚めたという説話「牛に引かれて善光寺参り」を描いた刷物です。黒牛は天台宗布引釈尊寺に祀られる観世音菩薩が姿を変えて現れたと伝えられています。男女を問わず救済する教えにより、女性の善光寺参りが盛んに行われました。



秋景山水図

水墨画 屏風絵 菅原竹侶／明治7年（1874）／えさし郷土文化館

菅原竹侶（1824－1893）は文政7年に菅原常恒の子として生まれ、名は圭之輔、常元、字は素遊（游）。画号に臥雲楼、錦雲堂、以雲楼を用い、水沢大畑小路に居住しました。水沢を代表する画人であり、優れた門弟を育成して地域の絵画文化の基盤を築きました。幼少期より須田一睡に学問を、砂金嘉門次郎に文墨を師事。24歳で砲術と絵画修業のため江戸へ赴き、砲術は井上左太夫、絵画は三井梅嶺に学び、短期間でその才能を発揮しましたが、主家の命により帰郷。25歳から52歳まで仙台と水沢を往来し、水沢伊達家やその家中邸で制作活動を展開しました。また、明治9年の明治天皇水沢行幸では、行在所の壁に山水画を描き、二幅の画を献上して嘉賞金を賜りました。

本作「秋景山水図」屏風は、水墨画によって晩秋の山の静寂と季節の深まりを繊細に表現する一方で、画中には人々の営みの様子も描かれ、現実的な生活感と幽玄な自然の調和を巧みに対比させています。淡墨と濃墨の使い分けにより、冷え込む山間の空気感や深まる秋のもの寂しさが伝わり、竹侶の自然観と高い画技が感じられます。

多くの門弟を育て、菅原嘯雲、砂金竹香、佐藤耕雲らを輩出しました。明治26年、69歳で逝去しました。

令和6年度実施の歴史資料等調査の概要

【歴史資料等の概要調査】

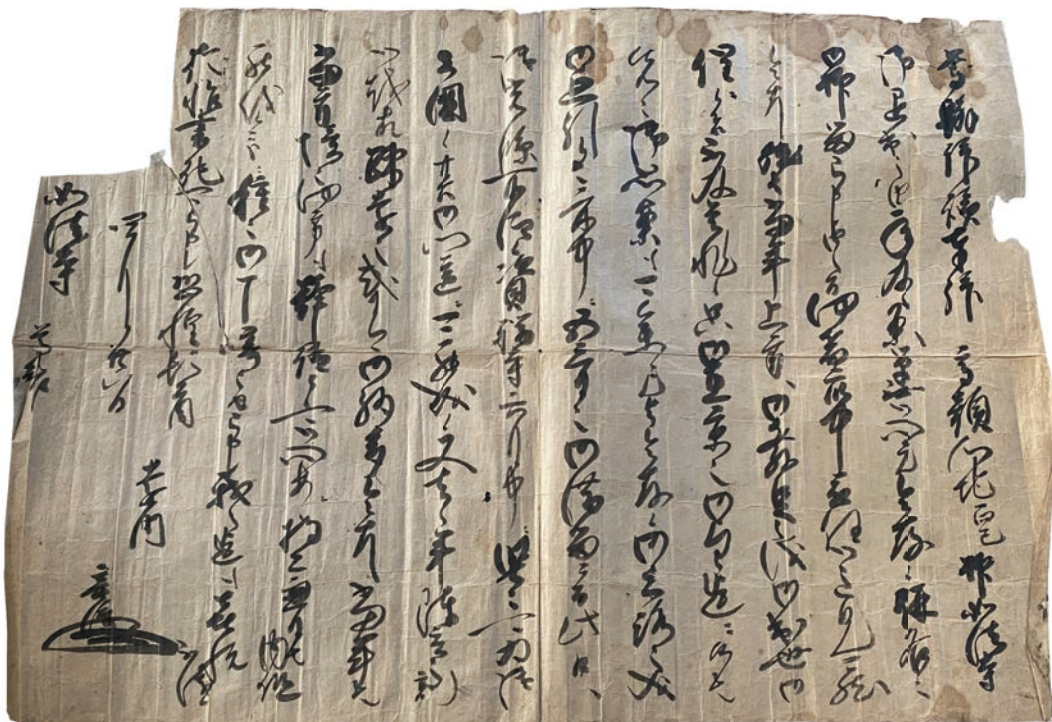
奥州市教育委員会では、受贈した資料群に対する概要調査を実施しています。概要調査は、箱や袋などの保管単位ごとに、どのような資料が、何点含まれているか、などを調査し、次の段階の調査に繋げるものです。

令和6年度には、小林晋一家文書や日高神社千葉家資料などの概要調査を実施しました。小林晋一家文書には、日記のほか、小林氏が生前関わっていた水沢市史などの編さん・調査に関係する調査データが膨大に残されていることが分かりました。日高神社千葉家資料には、日高神社宮司を務めた千葉家に伝来した「日高山多寶院」（近世の修験）の資料群のほか、近代の郷社日高神社の資料が含まれています。概要調査の終わった資料群については、準備が整い次第、目録作成やデジタル化を行い、公開していきます。

【政治家資料】

奥州市は後藤新平や斎藤實、小沢佐重喜、椎名悦三郎といった国家指導者となる有力政治家を明治時代から平成時代まで途切れることなく輩出し続けた全国でも稀有な地域です。このような著名な政治家の資料も多く発見されていますが、国会議員や市町村長、県議会・市町村会議員の資料が発見されています。政治家に関する資料は、地域社会の状況を色濃く反映しており、特に近代から現代の地域史研究では欠かせないものとなっています。

令和6年度（2024）には、明治時代から大正時代に衆議院議員や水沢町長などを歴任した下飯坂権三郎に関する資料をデジタルアーカイブ化して公開しました。また、近代の江刺郡愛宕村（現在の江刺愛宕地区）の村長を務めた小沢家に伝わった旧愛宕村関係の公文書などの調査と、戦後の江刺市長渡辺長純氏に関する資料の概要調査を行いました。



日高神社千葉家資料・遠藤基信書状（概要調査 1）

【調査予算】

小林晋一家文書の調査・研究 合同会社 AMANE と奥州市教育委員会の共同研究

愛宕小沢家文書の調査・研究 合同会社 AMANE と奥州市教育委員会の共同研究

下飯坂家文書の調査・研究 合同会社 AMANE と奥州市教育委員会の共同研究

令和6年国立歴史民俗博物館日本歴史文化知奨励研究「人口減少社会における近現代政治史資料のデジタルデータ化と地域社会連携の促進
—岩手県奥州市の地域資料の活用法」（研究代表者：東北大学大学院 伏見岳人教授）



木造 戸坂屋萬六像

木像 父祖像／江戸時代後期／奥州市

戸坂家は、江戸時代から続く水沢大町の商家で、明治時代の明治天皇行幸の際には邸宅が行在所として使用されました。

本像は、その着衣から江戸時代の「戸坂屋萬六」の坐像と考えられます。萬六は、仙台藩に軍用金を献上した功績により、胆沢郡瀬台野村に知行地を与えられていました。さらに、その名を継いだ子息も軍用金を追加で献上し、帯刀を許されるなど、代々藩に仕えた家柄であったことがうかがえます。



みょうけんぐうほういん
妙見宮宝印

版木 牛玉宝印／江戸時代後期～明治時代／奥州市

牛玉宝印^{ごおうほういん}は神仏の靈力を宿す護符とされ、災難除けや延命のご利益があると信じられ、中世以降、広く庶民に普及しました。

日高神社は水沢にある古社で、弘仁元年（810 年）の創建と伝えられ、源頼義・義家父子が戦勝祈願を行った社とされています。

本殿は寛永 9 年（1632 年）の再建で、岩手県下では江戸時代前期まで遡ることのできる数少ない建造物として国の重要文化財に指定されています。毎年 4 月に行われる「日高火防祭」の祭神として地域の信仰の中心となっており、多くの人々に親しまれています。

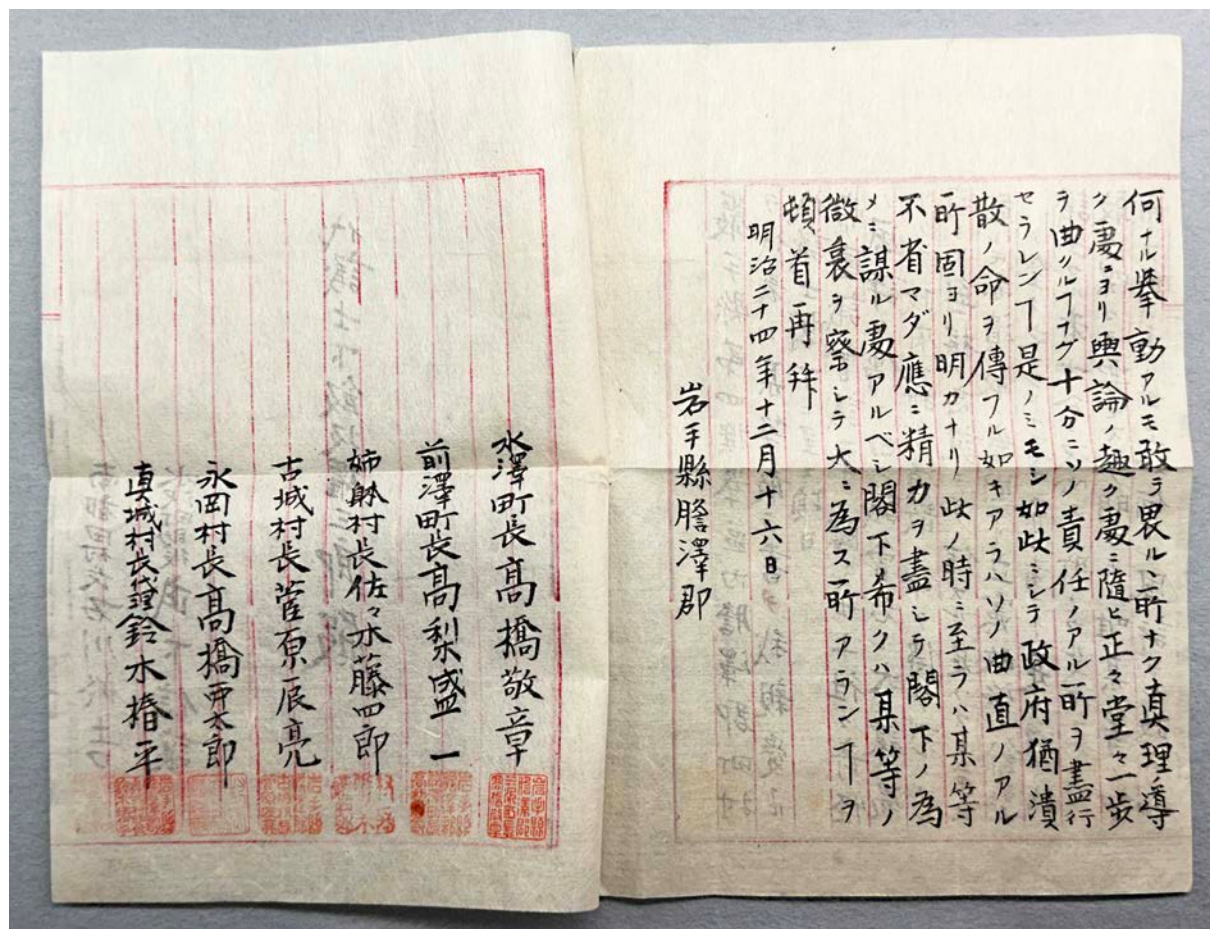


みょうけんぼさつ
妙見菩薩画像版木

護符（御影札）木版／江戸時代後期～明治時代／奥州市

日高神社は、北斗星の本地仏である妙見菩薩を祀る宮として信仰を集め、古くから「日高妙見」の名で親しまれてきました。妙見菩薩は北辰（北極星）を神格化した存在で、尊星王や北辰菩薩とも称されます。国土を守護し、災厄を退け、人々の願いを叶える力を持つとされますが、災厄消除、家内安全、商売繁盛、学業成就など、現世利益を願う信仰としても広く浸透しました。

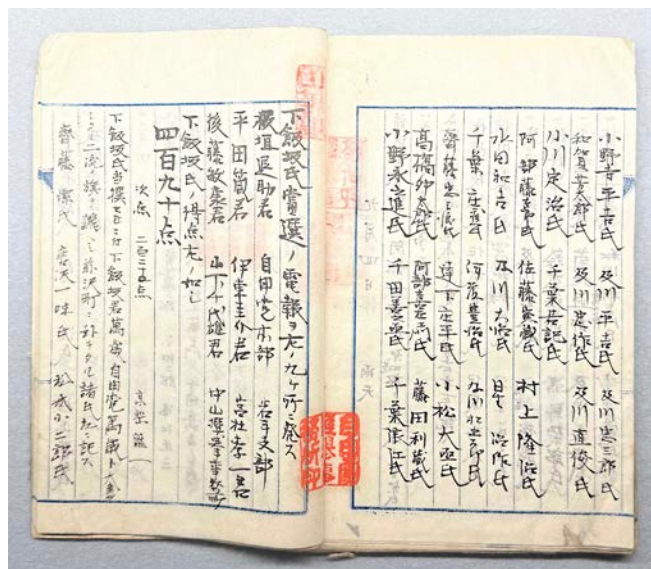
本図には、総髪の妙見菩薩を中心に、その両脇に武将神が侍す三尊形式が刻まれています。これは、道教の鎮宅靈符神と妙見菩薩を習合させた図像であり、妙見信仰の霊地として知られる能勢妙見山（大阪府）や、奥州市の黒石寺に伝わる妙見三尊像とも共通する構成です。こうした図像は神仏習合の信仰とその広がりを今に伝えています。



しもいさかごんざぶろう
下飯坂権三郎支持の連判状
簿冊 明治24年(1891)／奥州市

明治24年(1891)12月16日付で作成された本連判状は、岩手県第4区の衆議院議員であった下飯坂権三郎を支持する旨を、胆沢郡内の町村長らが連名で表明したものです。衆議院が同年12月25日に解散され、第2回衆議院議員総選挙が始まる直前のことであり、解散の機運が高まる中、一部の町村長がいち早く下飯坂支持を明確にしていたことがうかがえます。

この連判状には、水沢町長・高橋敬章、前沢町長・高梨盛一、姉妹村長・佐々木藤四郎、古城村長・菅原辰亮、永岡村長・高橋卯太郎、真城村長代理・鈴木椿平、南都田村長・石川修吉、水沢町助役・武下信讓の8名が名を連ねています。



下飯坂権三郎選挙事務所日誌

簿冊 明治27年(1894)／奥州市

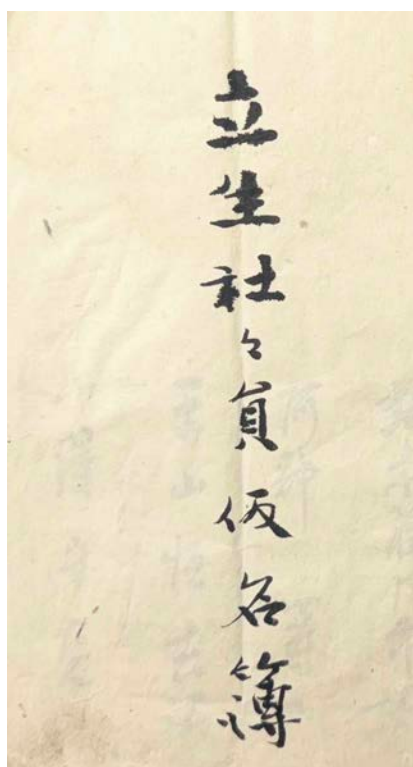
明治27年(1894年)の第4回衆議院議員総選挙の際に、下飯坂権三郎の選挙事務所が作成した日誌です。選挙活動に関する日誌が発見される例は全国的にも極めて少なく、当時の選挙の実態を知るうえで大変貴重な資料となっています。

日誌には、選挙事務所の運動員の動向や、選挙に関わる収支の記録が詳細に記されており、当時の選挙戦の様子を具体的に知ることができます。この選挙では、自由党の下飯坂権三郎と、対外硬派が擁立した高梨盛一が争い、下飯坂は票田である江刺郡と高梨の本拠地である前沢町を重点地域としていたことが読み取れます。

りゅうせいしゃ

立生社社員仮名簿

簿冊 明治時代／奥州市



明治15年(1882)1月、下飯坂権三郎・阿部靖之助・武下信讓らが中心となり、水沢において政治結社「立生社」が設立されました。これまで「立生社」の名称の由来については諸説ありましたが、『下飯坂家文書』に含まれる資料により、その名是水沢伊達家の郷学「立生館」に由来するものであったことが明らかになりました。

名簿には、下飯坂・阿部・武下のほか、小野金治(のちの高橋金治)、付岡兵助、八幡兵造らの名前も見られ、当時の水沢における政治運動の高まりをうかがい知ることができます。

令和6年奥州市内美術工芸品（仏像）調査

奥州市では、市内に現存する中世以前に制作された可能性の高い有形文化財（美術工芸品・彫刻）について、継続的な確認調査を実施しています。令和6年度は、胆沢若柳に所在する修徳山明善寺に安置されている「阿弥陀如来立像」を対象とした調査を行いました。

修徳山明善寺は、慶長2年（1597）に創建された浄土真宗本願寺派の寺院で、同年に本願寺御家老・下津摩隼入らが発行した「伊達政宗免許状」が伝来しており、当時の真宗布教の様相を窺い知ることができます。開山である千田道因は、俗名を親勝^{ちかかつ}といい、父の千田重勝^{しげかつ}は斯波氏^{しば}に仕え、南部氏との戦いの中で天正18年（1590）に戦死したと伝えられています。兄・則勝^{のりかつ}は大林城の柏山伊勢守^{いせのかみ}に仕えていましたが、伊達政宗によって滅ぼされたともいわれています。

親勝は先祖の菩提を弔うため、文禄2年（1593）に高野山に参籠し、同4年（1595）に帰国。その後、仙台北山正念寺の無為伝正空の弟子となって道因と称

し、胆沢郡新里村に草庵を結んだことが寺の起こりとされています。後に本願寺の准如上人に拝謁し、明善寺の寺号を賜りました。現在の本堂は文久3年（1863）の建立で、堂内の碁天井には花や波を極彩色で彩った装飾が施されています。また、寺宝として親鸞聖人御影、聖徳太子御影、蓮如上人御影などの軸物をはじめ、信仰に関わる多くの遺品が伝わっています。

本尊の阿弥陀如来立像は像高55.0cmで、これまで室町時代の作とされてきましたが、令和3年度に実施した概要調査において、東北大学の長岡龍作教授より、典型的な鎌倉時代の如来像に見られる特徴が備わっていること、また像内に納入品が存在する可能性があることが指摘されました。

この指摘を踏まえ、令和6年度の調査では、胎内納入品の有無を確認するため、岩手県立博物館においてX線透過撮影を実施しました。その結果、像内に納入品は確認されなかったものの、像の構造や制作技法、さらに過去の修理履歴など、造像当時や後世の信仰のあり方を知るうえで重要な情報が得られました。

奥州市では、今後も市内に所在する中世彫刻の文化財的価値を明らかにし、適切な保存と活用につなげるための調査を継続してまいります。



木造 阿弥陀如来立像
明善寺 鎌倉時代（13～14世紀）



X線透過撮影結果
（像を三分割に撮影）
（じゆんによ

上萩森遺跡

調査機関：東京大学文学部考古学研究室

上萩森遺跡は、胆沢扇状地の扇頂部にあたる、標高約 270 m の西根段丘面上に位置しています。昭和 50 ～ 52 年に行われた発掘調査で、後期旧石器時代前半期の石器が多量に出土したことで知られる、岩手県内でも最古級の遺跡の一つです。

今回、日本列島の旧石器時代の編年の精度を高める研究の一環で、東北地方でも最古段階の遺跡に位置付けられる上萩森遺跡の再発掘調査と、過去の調査で出土した石器の分析が行われました。

昭和の時代に発掘調査が行われた場所は大きく開削され、現在はデントコーン畑となっています。今回調査が行われた場所は、昭和調査区の南側に残る段丘面上（衣川増沢地内）になります。

段丘崖を食い込むように設けた 4 つの調査区に加え、段丘面上にも複数の試掘坑を設け、遺跡の残存状況の確認と新たな旧石器資料の発見を目指しました。残念ながら旧石器の発見には至りませんが、縄文時代草創期から早期に属する石器や土器片が少量、出土しました。

新たな旧石器資料を得ることはできませんでしたが、堆積土中に含まれる火山灰の分析や堆積環境に関するデータを得ることができたため、これらのデータをもとに、昭和調査の際に出土した、全ての旧石器の再検討を行うこととなりました。発見から 50 年が経った上萩森遺跡出土の旧石器を、令和の最新の研究で再評価していただきました。

上萩森遺跡出土石器のうち、本遺跡を特徴づけているのが、ペン先形ナイフ形石器（台形様石器Ⅱ類）に分類される石器群です。長さ 3 cm 前後の小型の石器で、その名の通り、万年筆のペン先のような形をしています。珪質頁岩、玉髄、碧玉、珪質凝灰岩など、多様な石材が用いられています。遺跡に近い胆沢川や北股川から採取されたと考えられますが、珪質頁岩は、日本海側で多く採取される石材なので、上萩森旧石器人が、石材を求めて奥羽山脈を越えていったことが想像できます。

また、これらの石器を顕微鏡で観察したところ、実際に使用された可能性を示す痕跡が確認されました。狩猟具や皮革の加工（皮なめし）などに使用されていたようです。

上萩森遺跡の地質調査と火山灰の分析からは、約 5 ～ 6 万年前の焼石山形軽石層の上位の土層中から、約 3 万年前の始良 Tn 火山灰などに由来する可能性のある粒子が見つかりました。石器は、この火山灰粒子が含まれる層より下層で出土していることと、秋田県の石器の年代との比較から 3 万 ～ 3 万 4 千年前のものと考えられます。



ペン先形ナイフ形石器（台形様石器Ⅱ類）



遺跡遠景（東から）矢印のあたりが調査区



調査風景

中井遺跡

調査機関：(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

中井遺跡は、胆沢南都田字中井地内に所在し、胆沢川南岸に立地します。圃場整備事業に係る緊急発掘調査のため、今年度は1,320㎡を調査しました。今回は西側をA区(1,050㎡)、東側をB区(270㎡)として調査を行いました。A・B区ともに調査前には水田として利用されていたため、遺構の上面は削平されていました。特にA区の北側は水田面のかさ上げのために地形改変されており、遺構はみつかりませんでした。

今回の調査でみつかった遺構は、古代～中世の土坑1基・旧河道2条、江戸時代の土坑墓3基・溝1条、時期不明の水田跡1箇所・土坑1基・溝8条・柱穴30個です。

出土した遺物は、土器(縄文土器・土師器・須恵器)と古代～江戸時代の陶磁器(常滑・渥美・中国産染付など)小コンテナ1箱分、寛永通宝20枚、煙管4点、ガラス小玉約20点、櫛1点、石臼1点、棺材が小コンテナ2箱分です。

A区では、江戸時代のお墓が3基みつかりました。3基とも長軸が1m前後の方形または隅丸方形の土坑墓で、深さは5～30cmです。このうち1基(ASK03)には木棺が残っていました。墓の中からは、人骨片・寛永通宝・煙管・櫛・ガラス小玉(ASK01)などの副葬品が出土しました。なお、江戸時代のお墓は密集することが多く、中井遺跡でもA区の南側の調査区外に複数のお墓が存在する可能性があります。

B区では、旧河道に挟まれた範囲約45㎡で足跡や耕作痕を残す水田跡がみつかりました。出土遺物はありませんが、明治時代以降の水田造成で削平されていることと、足跡や耕作痕に平安時代に堆積したと考えられる黒褐色土や白色の土(火山灰?)が含まれることから平安～江戸時代のいずれかの時代と考えられます。

地形改変の影響で遺構・遺物の残りは良くありませんが、A区は主に江戸時代の墓域、B区は古代以降の生産域として使われていた場所であることがわかりました。



令和6年度調査区全景(直上、上が北)



ASK03 棺材出土状況(西から撮影)



ASK01 から出土したガラス玉



水田跡の足跡・耕作痕掘り上げ状況(東から)

中林下遺跡

調査機関：（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

中林下遺跡は、奥州市水沢真城字中林下地内に所在（標高 40 ～ 42 m）します。遺跡は、国道 4 号水沢東バイパス建設事業（令和 4 ・ 5 ・ 6 年度）や圃場整備事業（令和 2 ・ 3 年度）に伴って発掘調査が行われ、平安時代（9-11 世紀）や奥州藤原氏の時代（12 世紀後半）、戦国時代や江戸時代の遺構や遺物が見つっています。

主な遺構は、平安時代の掘立柱建物 40 棟、竪穴建物 9 棟、池状遺構 6 基、土坑 23 基、溝 3 条など、奥州藤原氏時代は掘立柱建物 1 棟、土坑 1 基、溝 1 条、戦国時代では居館 2 箇所、掘立柱建物約 35 棟、堀 5 条、溝 28 条、池状遺構 3 基などです。出土遺物は、平安時代が土師器・須恵器を中心に、施釉陶器、瓦、掘立柱建物に使用した柱材に用いられた礎板・枕木など、奥州藤原氏時代では、渥美・常滑産陶器、中国産白磁、かわらけ、戦国時代では陶器や銭貨、木製品、柱材などがあります。

平安時代の掘立柱建物は、多くが大きな四角形（一辺 30 - 90cm）の柱穴で構成されます。建物の大きさは、平面積 40 ～ 60㎡のものが中心ですが、100㎡前後の建物も 4 棟見つっています。最大の建物は約 128㎡あります。本遺跡は、竪穴建物が主体となる当時の一般的集落とは違い、大小の掘立柱建物群で構成されるのが特徴です。掘立柱建物を主体とする遺構群は、奈良時代から継続する伝統的な集落から発展したものではなく、平安時代になってから新たに出現（9 世紀前半頃か）したことが分かりました。そして 10 世紀中頃までは続いていたようです。胆沢城とも関係が深く、公的な性格を持つ遺跡の可能性が高いと考えています。

奥州藤原氏時代の遺構や遺物は、調査区の北西側を中心に見つかりました。遺構は少ないですが、奥州藤原氏に従う在地有力者の居所であった可能性が考えられます。



令和 6 年度調査区全景（直上、上が西）



平安時代の掘立柱建物（南から撮影）



平安時代の柱穴と柱材（東から撮影）



土師器などが捨てられていた土坑（南から）

し ろ と り た て

白鳥館遺跡 第23次調査 調査機関：奥州市教育委員会

2024年度の調査では、郭Ⅱの平場北部について中心建物と門跡の確認を目的として発掘調査を実施しました。

主郭である郭Ⅱの平場では、郭Ⅱの北部、白山神社周辺を中心に調査を行いました。郭Ⅱ北部では、23T7と23T8の東部が盛土整地により平坦面が拡張されていることがわかりました。また、23T6と23T7、23T9では比較的規模の大きい柱穴が多数確認されたほか、鍛冶炉跡が1基確認されました。調査区からは、15世紀頃のかわけ、白磁、古瀬戸などが出土しました。

柱穴は23T7～23T9にかけて分布し、周囲には遺物が集中していることから、城館の中心建物は白山神社付近にあり、東西方向に延びる建物の可能性が高いと考えられます。

郭Ⅱ北西部に設定した23T1と23T2では、西辺の土塁内側に南北の溝跡23SD17が確認されました。また、北東隅の土塁の内側は壇状に高まり、何らかの遺構であることが推察されます。

23T1と23T2で確認した土塁は、大部分が地山を削り出し、上部の一部のみが盛土された削り出し土塁であることがわかりました。

門跡を確認するため、23T4、T5を設定しましたが、門跡は確認できませんでした。これまでの想定通り、通路であると推察されます。

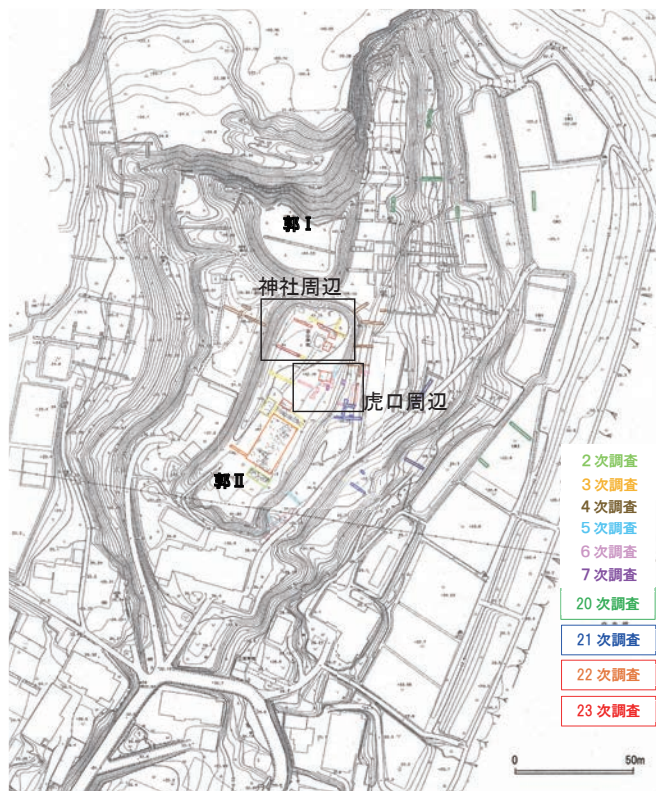
今年度の調査では、郭Ⅱの北半、白山神社周辺で多数の柱穴と遺物が確認され、城館の中心建物は、白山神社周辺に存在する可能性が高いと考えられます。これにより白鳥館遺跡の主郭は、北に主要建物、南には広場という空間構成であることが明らかとなりました。



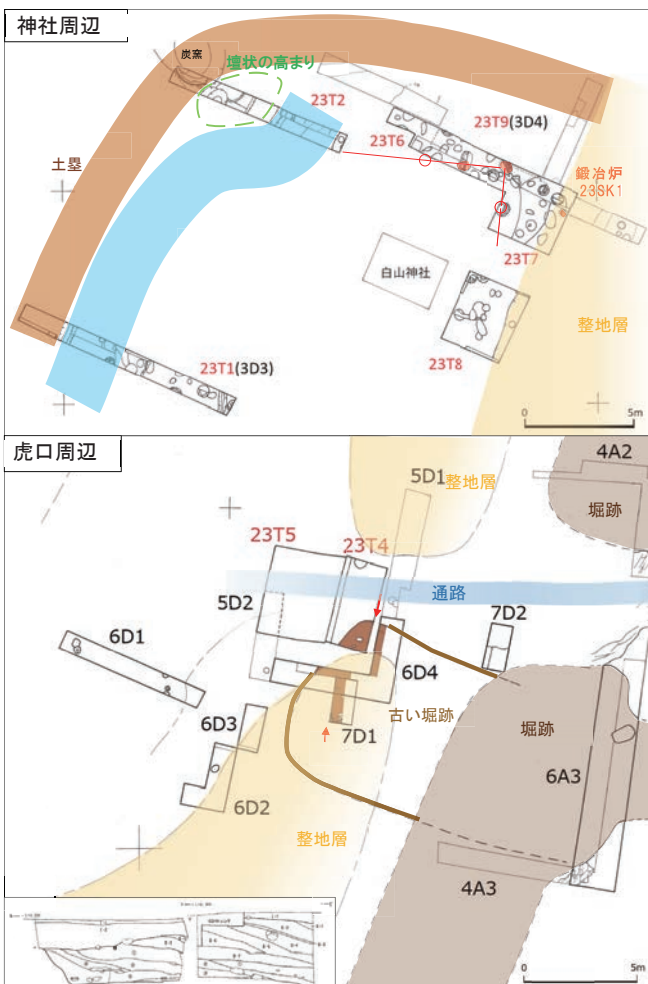
柱穴群 (23T7、23T9. 東から)



土塁と溝跡 23SD17 (23T1 東から)



白鳥館遺跡第23次調査区位置図



第23次調査遺構配置図

奥州市の国登録有形文化財

市内には国登録有形文化財になっている建造物が、18件、存在します。あまり耳馴染みのない言葉かもしれませんが「登録有形文化財」とは、建設後50年を経過したもののうち、地域に親しまれている建物や時代の特色をよく表したものの、再び造ることができないものなど、一定の評価を得たものを文化財として登録し、届出制という緩やかな規制を通じて保存を図り、活用を促進しようとする制度です。

奥州市教育委員会ではこれまで、奥州市で所管する建造物を中心に、東北工業大学建築学科の教授や学生の協力をあおぎ、建物図面の作成や歴史的評価を行ってきました。本企画展では、市内の国登録有形文化財のうち、昨年新たに登録になった5件を紹介します。



旧高野家住宅古稀庵

蛭社の獄で弾圧された蘭学者・高野長英の復権活動に尽力した、高野家13代・長運の古稀を祝って、息子・長経が昭和6年に建てた建物です。銘木を多用し、組子細工のガラス障子や掛障子を用いた内部意匠、床や床脇のしつらいなどに工夫がみられます。



旧高野家住宅新座敷

長経が住んだと伝わる建物で、主屋である高野長英旧宅（国史跡）と古稀庵をつなぐように建てられています。昭和16年頃の建築と考えられます。南側に廊下を設けた続き座敷で、建具や欄間、天井に幾何学的な組子細工が多用され、壁面に作りつけの戸棚が設置されるなど、文人趣味の書斎のような雰囲気を漂わせています。



旧高野家住宅板倉

明治時代後期の建築と推定される板倉です。板倉は、近世武家屋敷の屋敷構え（門・主屋・板倉）の構成要素の一つでした。近代和風住宅である旧高野家住宅ですが、近世の武家屋敷の屋敷構えを継承していることを示す建築物です。



旧高野家住宅瑞臯文庫

昭和7年建築の建物です。建物内部の金庫に、長運・長経親子によって収集された長英ゆかりの歴史資料が保管されていました。現在それらの資料群は高野長英記念館に移され、そのうちの58点が重要文化財に指定されています。なお、「瑞臯」とは、高野長英の雅号で故郷の水沢を意味しています。



愛宕神社本殿（旧愛宕山大権現堂）

旧高寺村の鎮守で、火伏せの神、北上川舟運の守護神として信仰されてきました。現在の社殿は、正徳4年（1714）に建てられたものです。中備の墓股には十二支の彫刻が刻まれています。この彫刻部分や室内の組物などに胡粉や漆塗の痕跡が見られるので、当初は華やかな彩色が施されていたと考えられます。社殿内には、信仰の篤さをうかがわせる船絵馬（市指定有形民俗文化財）も残されています。



墓股の十二支彫刻（丑）

奥州市内国登録有形文化財一覧

登録名称	建築年代	所在地	所有者（代表者）	登録年月日
千葉家住宅主屋	明治 25 年	江刺稲瀬字伊加里	個人	平成 15 年 3 月 18 日
旧緯度観測所本館（奥州宇宙遊学館）	大正 10 年	水沢星ガ丘町	奥州市	平成 29 年 10 月 27 日
旧臨時緯度観測所本館（木村榮記念館）	明治 33 年	水沢星ガ丘町	大学共同利用法人 自然科学研究機構	平成 29 年 10 月 27 日
旧臨時緯度観測所眼視天頂儀室	明治 32 年	水沢星ガ丘町	大学共同利用法人 自然科学研究機構	平成 29 年 10 月 27 日
旧臨時緯度観測所眼視天頂儀室目標台及び覆屋	明治 33 年	水沢星ガ丘町	大学共同利用法人 自然科学研究機構	平成 29 年 10 月 27 日
後藤伯記念公民館	昭和 16 年	水沢大手町	奥州市	令和元年 12 月 5 日
齋藤子爵水沢文庫図書庫	昭和 7 年	水沢吉小路	奥州市	令和 3 年 10 月 14 日
齋藤子爵水沢文庫図書閲覧所	昭和 7 年	水沢吉小路	奥州市	令和 3 年 10 月 14 日
旧安倍家住宅主屋	明治 10 年頃	水沢字日高小路	奥州市	令和 4 年 6 月 29 日
旧安倍家住宅板蔵	明治 10 年頃	水沢字日高小路	奥州市	令和 4 年 6 月 29 日
旧安倍家住宅土蔵	明治中期 ないし後期	水沢字日高小路	奥州市	令和 4 年 6 月 29 日
旧安倍家住宅表門	昭和初期	水沢字日高小路	奥州市	令和 4 年 6 月 29 日
旧安倍家住宅庭門	大正から 昭和初期	水沢字日高小路	奥州市	令和 4 年 6 月 29 日
旧高野家住宅古稀庵	昭和 6 年	水沢字大畑小路	奥州市	令和 6 年 8 月 15 日
旧高野家住宅新座敷	昭和 16 年頃	水沢字大畑小路	奥州市	令和 6 年 8 月 15 日
旧高野家住宅板倉	明治後期	水沢字大畑小路	奥州市	令和 6 年 8 月 15 日
旧高野家住宅瑞皇文庫	昭和 7 年	水沢字大畑小路	奥州市	令和 6 年 8 月 15 日
愛宕神社本殿（旧愛宕山大権現堂）	正徳 4 年 (1714)	江刺愛宕字西下川原	(宗) 愛宕神社	令和 6 年 12 月 3 日



旧緯度観測所本館（宇宙遊学館）外観



後藤伯記念公民館



齋藤子爵水沢文庫図書庫外観



旧安倍家住宅主屋外観

奥州市関係資料のデジタルアーカイブ化

奥州市教育委員会では、市で受贈した資料や市域に関係する個人蔵の資料のデジタルアーカイブ化を進めています。デジタルアーカイブでは、資料の目録情報に加え、一部資料の画像を掲載し、誰でも資料にアクセスできる環境を整えています。

デジタルアーカイブの構築については、合同会社 AMANE・国立歴史民俗博物館メタ資料学研究センター・奥州市教育委員会の産学官三者連携のもと、全国各地の研究者の協力を得ながら進めています。令和6年度(2024)には、以下の資料群のデータを新たにデジタルアーカイブで公開しました。

【国立歴史民俗博物館デジタルアーカイブ「khirin」】

① 梁川伊達家文書（奥州市蔵、江戸時代～近代）

江戸時代に野手崎所（現江刺梁川地区）を与えられていた仙台藩士小梁川氏（近代は伊達氏）に伝来した資料群。

② 下飯坂家文書（奥州市蔵、明治・大正時代）

衆議院議員、水沢町長などを歴任した下飯坂権三郎に關係する資料群。

③ 鹿又家・吉川家文書（個人蔵、江戸時代）

鹿又家文書は、江刺郡次丸村などに所領を与えられていた仙台藩士鹿又氏の伝来文書を中核とする資料群。吉川家は、胆沢郡白鳥村に知行地を与えられていた仙台藩士吉川家伝来の資料群。

【調査予算】

下飯坂家文書の調査・研究（令和6年度実施） 合同会社 AMANE と奥州市教育委員会の共同研究
人間文化研究機構機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本歴史文化知の創成とオープンサイエンス研究」
（研究代表者：国立歴史民俗博物館 後藤真准教授）

令和6年国立歴史民俗博物館日本歴史文化知奨励研究「人口減少社会における近現代政治史料のデジタルデータ化と地域社会連携の促進—岩手県奥州市の地域資料の活用法」（研究代表者：東北大学大学院 伏見岳人教授）

令和6年国立歴史民俗博物館日本歴史文化知奨励研究「移動する前近代文書への効果的調査手法の構築と情報共有基盤の確立に関する研究」（研究代表者：奥州市教育委員会 高橋和孝主任学芸員）

科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 20H01382「研究室データの早期公開を加速する「逐次公開」型運用モデルの確立と複数分野での実証」（研究代表者：金沢大学 高田良宏准教授）

【合同会社 AMANE デジタルアーカイブ「AMANE Archives」】

④ 学校資料（奥州市蔵、明治時代～令和時代）

今年度掲載分は、令和5年度(2023)に閉校した水沢の黒石小学校と胆沢の胆沢愛宕小学校の学校資料。



「khirin」



「AMANE Archives」

このほか、小山油地渡邊家文書や戸坂家資料などについて、デジタルアーカイブ化を進めています。戸坂家資料は、戸坂家の邸宅が明治天皇の東北巡幸に際して「行在所」に指定された際の資料や当時の戸坂家当主萬六氏に關係する資料となっています。巡幸に關係する資料が一括で保存されており貴重です。



デジタルアーカイブ
（戸坂萬六肖像画）

岩谷堂猪狩家資料の調査

岩谷堂猪狩家資料（奥州市所蔵）は、近世の仙台藩士猪狩家に伝わった家伝文書を中核とする資料群です。猪狩家は、岩谷堂伊達家に預けられた「御預給主」と呼ばれる身分で、仙台藩士でありながら岩谷堂伊達家の支配下に位置付けられていました。近代にも、衆議院議員・岩谷堂町などを歴任した猪狩八郎を輩出し、地域で重要な役割を果たしています。

同資料群は令和2年(2020)に概要調査が行われ、合計して約5,600点の資料が含まれていることが判明しています。令和5年から、福井大学の藤方博之准教授を中心とした研究者グループにより、各資料への付番、写真撮影、目録化の調査が進められています。現在までに計4回の調査が行われ、その成果が地域史研究講座で公開されています。

令和6年(2024)の調査では、猪狩家をはじめとした旧岩城家臣が岩谷堂伊達家の御預給主になる以前に集住していた胆沢郡浅野（現在の胆沢南都田濁川周辺）の現地調査も行いました。現地では、岩谷堂の御預給主が幕末に建立した神社や猪狩家の古い墓石などを確認しました。浅野に關係する文書は岩谷堂猪狩家資料にも含まれており、旧岩城家臣の給主たちにとって、浅野が由緒の地の一つとして強く意識されていたことが分かりました。

また、岩谷堂伊達家や岩谷堂の御預給主の知行地が混在していた江刺郡増沢村（現在の江刺岩谷堂増沢）の肝入を務めた菅原家の文書の番号付与を行いました。その中から、仙台藩士の知行地管理に關係する資料の写真撮影を行いました。

【調査予算】

科学研究費助成事業

基盤研究 (C) 23K00807「地方知行制下の藩領における在郷武士と相給村落に関する研究」（研究代表：福井大学 藤方博之准教授）



浅野絵図（岩谷堂猪狩家資料）

協 力

奥州市武家住宅資料館

参考文献

- | | |
|---------|-------------------------------------|
| 水沢市 | 1985 年『水沢市史 3 近世（下）』 |
| 江刺市 | 1987 年『江刺市史 第二巻 通史編 近世』 |
| 水沢市立図書館 | 1981 年『水沢風土記第一巻 水沢画人伝』 |
| 岩手日報社 | 2002 年『いわて未来への遺産 近世・近代をたどる 江戸～明治次代』 |

奥州市文化財調査速報展 2025

らずもねえ 奥州風雅乃時語

主催 奥州市教育委員会
えさし郷土文化館
奥州市牛の博物館
一般財団法人奥州市文化振興財団
奥州市埋蔵文化財調査センター

2025 年 7 月 5 日発行

奥州市教育委員会事務局歴史遺産課

〒 023-1192 奥州市江刺大通り 1-8

TEL 0197 (34) 1315

FAX 0197 (35) 7551

E-Mail rekishi@city.oshu.iwate.jp



奥州市教育委員会事務局歴史遺産課
えさし郷土文化館
奥州市牛の博物館
一般財団法人奥州市文化振興財団
奥州市埋蔵文化財調査センター